

フィールド  
レポーターだより!!

ユンベ、ナオライで  
ドロズを食うたで。



2009 年度第 2 回調査

## “近江ことば いまむかし”調査 結果報告

大阪弁でも京都弁でもない「近江ことば」のすばらしい報告書が、フィールドレポーターの村上さんたちの手によってできあがりしました。

「近江ことば」の実態を明らかにし、使用頻度やその減少の要因、「近江ことば」を守る糸口を見つけないと目的ではじめられたこの調査、思いのほか多くの地域の人びとの協力が得られたようです。地域のことばに対する人びとの思い入れというものをあらためて実感しました。

私自身は日本考古学を専攻する学芸員で、こうした方言や言語文化を調査研究した経験は皆無なのですが、琵琶湖博物館の学芸員の中で、唯一、半世紀以上も滋賀県に生まれ育った者としてこの感想文を寄せています。

私の父は明治生まれで、大正 7 年(1918 年)に彦根の造り酒屋へ丁稚奉公に入り、最後は番頭で終わりました。余談ですが、当時の勤め先の電話番号は、「彦根2番」だったそうです。従って、町家ことばというか商家のことばづかいを私も覚えたものですから、今度の調査によって地域による違いもさることながら、同じ町でもありながら農家のことばとの違いを痛感しました。

今回、回答者の職歴を「地域密着」「会話稀少」「対人信頼関係」「専門用語」「指揮・伝達」「共通語」に分類されました。実に、よく考えられた分類でした。データは「平均評価点」を算出し、年齢が低いほど使用頻度が少ないことを数字で明らかにしました。その理由も考察し、地域の言葉を守るためには、地域での世代を超えた頻繁な交流が必須条件だと説いておられます。

「近江ことば」は、「人の心をあたたかく和ませる力」をもち、「独特の音韻とやわらかい言い回しによって、人と人をつなぎ、場を和ませてくれる」もので、「近江の人たちの心であり文化である」と位置づけておられます。そしてそのことは、「報告5」にある「回答者の“近江ことば”に対する思い」を読めば、よくわかりました。

「親しみがある」「おもしろい」「やわらかい」「あたたかい」「奥深い」「楽しい」「気取らない」「ぬくもり」「おっとり」「おだやか」といった感想があふれています。是非そちらもご一読下さい。

今は正月、外は雪です。

「ちょぼっとぬくといこたつにでもはいたらどうや」「ほやさかいほんなカイロはふてたらどうや」。

# “近江ことば いまむかし”調べ 結果報告

FRS 村上 靖昭

“ことば”は文化そのものであり、長きに亘りその土地で使われていることばを抜きにしてその土地の文化・歴史を語ることはできないでしょう。そしてそのことばは、それを使う人たちの人柄を表すとも言われています。

滋賀県は日本のほぼ中央部に当たり、大きな琵琶湖をいだけ淡海の国と呼ばれていたころより、その地理的環境から交通の要衝であるばかりでなく、楽市や近江商人の「三方よし」に象徴されるような経済文化、紫式部が源氏物語を石山寺で執筆したとされるような叙情文化、寺社や重要な文化財の数では日本屈指といわれるような精神文化、大和政権や日本政治の中核を狙う戦国武将たちの活躍の場として大きな役割を果たした政治文化など、日本文化の礎を築き、それぞれの文化を表すふさわしいことばを生み出してきました。その時々語られていた近江発祥のことばは、現在、日本の共通語としていることばの中にも数多く見受けられます。

ところが、表題の“いまむかし”にあるように、これまで慣れ親しみ使われてきた近江のことばを近頃使う人が少なくなっているように感じ、実際は如何ばかりのものなのか、できるだけ多くの方々に伺って、その実態を年齢別・性別・居住地域・居住歴・職歴などによる使用頻度の差異をアンケート調査によって明らかにしようと思いました。また、その中で表れてくる結果と諸般の社会事象を照合し、使用頻度が減少している要因を探るべく考察しました。あわせて、近江ことばを守り続けていけるような糸口が見出せれば、との希望を持って実施しました。

## 1. アンケート回答数について

表-1 回答者性別年齢構成

年齢	男	女	計
8歳	1	0	1
10歳代	5	5	10
20歳代	8	6	14
30歳代	9	19	28
40歳代	22	37	59
50歳代	21	38	59
60歳代	43	52	95
70歳代	32	26	58
80歳代	13	14	27
90歳代	0	1	1
年齢性別等不詳			35
合計	154	198	387

今回の調査では、表-1にあるように、調査実施当時のフィールドレポーター登録者数100余名の3倍を超える方々から回答を寄せていただきました。このことは、とりもなおさず、フィールドレポーターの方々が多くの知人・ご家族に声をかけてくださったご尽力の賜物であると思います。ありがとうございました。

調査の主旨からすれば、若い人から高齢者まで満遍なく、すべての年代の方々の実態を明らかにすることにありましたが、フィールドレポーターの年齢構成が40～60歳代に集中しており、結果として偏りが出たのは止むを得ぬことだと思います。

一部や多くの回答が無記入であったり、地域でまとめていただいた回答の中には、多くの方の年齢・性別等分析に必要な情報が抜けているものがありました。申し訳ありませんが、項目によって分析の一部から除外しました。

## 1-2 回答者の居住歴

日常、自分の意思を率直に表すために使っていることばは、その土地のことばであり、言語認識が確立する幼・少年期に過ごした土地のことばでしょう。それらを検証するために出身地の割合を示したものが図-1 および図-2 です。

その数の合計が一致しないのは先に述べた個人情報等の無記入によるためです。以後、合計の一致しないのもこれと同様です。

地域の境界をどこにするかについては諸説があり、実際、同じ地域であっても湖岸側と山地側では大きく違っていたり、川ひとつ越えれば違うことばというように、大変むずかしい課題でした。

そこで、独断ではありますが、別活動を通じて知り合った県内各地の人々の意見を参考に境界線を設定しました。

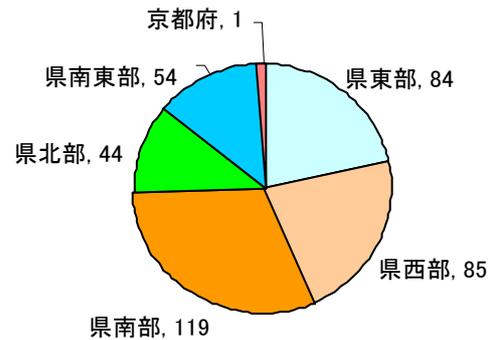


図-1 回答者現住所 (人)

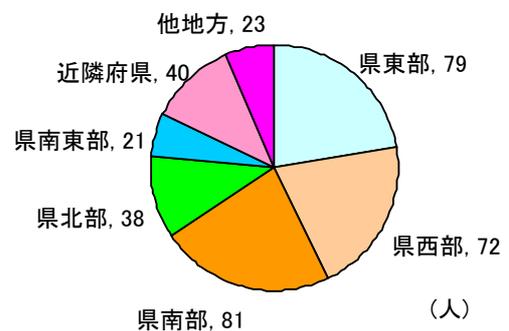


図-2 回答者出身地(幼・少年期居住地)

## 1-3 回答者の職歴

それぞれの回答者にとって、自分がどの職種に相当するのか迷われた方も多かったかと思います。具体的な職種を挙げるのも一方法であったと思いますが、同じ職種であっても、その担当部署や役職によってことばづかいが変わってきます。

そこで、各職歴について想定した職種は次のとおりです。

- \* 「地域密着」 専業農林漁業者、個人商店、専業主婦等、社会生活がほぼ地域社会に限られる方
- \* 「会話稀少」 主として技術職や事務職等で、黙々と職務に従事されている方
- \* 「対人信頼関係」 不特定の方とその場に応じて信頼関係を構築する必要のある営業職や応対、保育・介護・医療看護等に従事されている方
- \* 「専門用語」 法曹関係や研究職のように会話の多くが専門用語である方
- \* 「指揮・伝達」 言語が単純明瞭で確実な伝達を必要とする公安・保安関係、指揮官等
- \* 「共通語」 アナウンサーや義務教育・日本語学校の教員のように、共通語の使用を強く要求される職種

しかし、これらの受け止め方はさまざまでしょうし、重複する面もあると思いますが、それぞれの判断を尊重して分析しました。

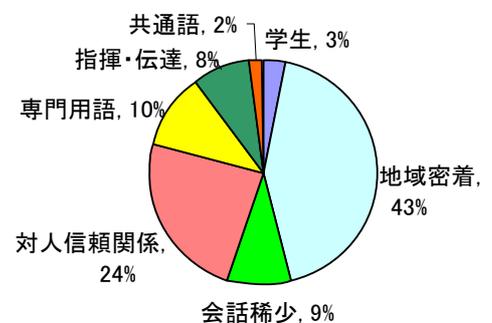


図-3 回答者の言語的職歴

## 2. 近江ことばの使われ方

表-2 近江ことば使用・認知度 (回答者総数352:無記入を含む)

順位	近江ことば	共通語(語意)	回答数				平均評価点		
			◎	○	△	×	男	女	全体
1	ユンベ	ゆうべ・昨夜	87	87	127	47	53.7	40.9	46.6
2	ナオライ	(神祭事後の行事)※	130	31	67	122	54.8	39.1	46.4
3	ドロズ	酢味噌	121	35	43	151	43.2	41.6	42.6
4	ヤマイキ	(林・森の手入れ)	85	63	69	133	40.7	36.0	38.2
5	ハサコマル	挟まって取れない	74	62	79	136	37.5	33.4	35.5
6	オイネル	背負う	52	77	98	125	33.0	31.3	32.7
7	ヘソコ	(形のゆがみ)	66	33	42	202	27.7	37.2	27.1
8	ケツラカス	蹴散らかす	35	49	110	157	23.8	24.7	24.8
9	キシクル	きしむ	49	40	49	211	24.7	22.5	23.3
10	カタミニ	交互に	57	30	44	220	25.7	21.3	23.6
.....									
41	チョウケ	手桶	7	11	32	327	6.3	5.3	5.4
42	ミダカル	乱れてからまる	8	9	12	318	6.8	2.6	4.5
43	ソバエル	はしゃぐ	4	10	15	321	4.1	3.3	3.6
44	アブロ	虻	4	7	20	320	4.7	2.8	3.6
45	サクマイガヨイ	要領がよい	5	4	9	332	3.3	2.2	2.6
46	ヒンズ	不意	4	2	7	337	1.0	2.7	1.9
47	シタマワリ1	おかず	0	5	10	335	1.7	1.3	1.4
48	オガンダ	かまきり	1	3	6	341	2.3	0.3	1.1
49	ゴンギリメ	一所懸命に	1	2	7	340	1.0	1.1	1.1
50	シタマワリ2	彼岸花	2	1	4	343	1.2	0.9	1.0
全体平均							15.8	14.3	14.9

※ 滋賀県では一般的の行事後の宴にも用いられている

◎: 今でもよくつかっている
○: 以前は使っていたが、今は使っていない
△: 会話で聞いたことがあり、意味もわかるが、自分では使っていない
×: 会話で聞いたこともなければ、意味もわからない(わかりにくい)

評価点: ◎=100、○=50、△=25、×=0

### 平均評価点の算出方法

$(100 \times \text{◎の回答数} + 50 \times \text{○の回答数} + 25 \times \text{△の回答数}) \div (\text{◎} \cdot \text{○} \cdot \text{△} \cdot \text{×の回答数の合計})$

例:「ユンベ」の全体平均

$(100 \times 87 + 50 \times 87 + 25 \times 127) \div (87 + 87 + 127 + 47) = 46.62 \dots \rightarrow$ 四捨五入により 46.6

以後、同様に平均評価点を求めました。

例示した近江ことば(50語)の使用・認知度に応じて回答された結果を上位・下位それぞれ10語を示したものが表-2です。

全体的に見て、近江ことば(語彙)の使用・認知度は、当初予想していた以上に低いものとなりました。以後、さまざまな観点から分析していきます。

## 2-2 年齢別に見た使われ方

年齢が低くなるにつれ、近江ことばの使用・認知度は低い結果が出ました。(図-4)

これには、社会的要因が大きく影響しているものと思われます。そのいくつかを推察すれば、

\* 核家族化の進行<sup>註</sup>や、地域の行事・

共同作業参加者減少によって地域のつながりが稀薄となり、年長者から年少者へと昔からのことばを伝える場が失われてきている。

<sup>註</sup> 国勢調査、滋賀県1世帯あたりの人数；1960；4.8人→現在；2.9人

\* TV普及率が1960年代半ばには90%を超えて、聞くのも話すのも共通語が主体となった。

\* 1980年代半ばから90年代にかけて、家庭用ゲーム機が大普及し、一人遊びや仲間内だけの付き合いが増えて、会話そのものが減ってきた。

\* 交通手段の発達によって、容易に遠方の方々との交流が可能となり、その地のことばと共通のことばでの会話が増大した。

以上の中でも、交通移動手段の発達が最も影響しているのではないのでしょうか。

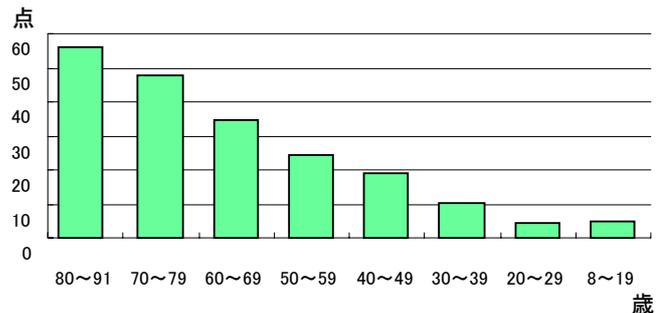


図-4 年齢別近江ことば使用・認知度(平均)

## 2-3 用途・語形等(分類)による使われ方

どのようなことばがよく使われているのか、また、使われなくなっているのかをいくつかに分類して比較したものが表-3です。

表-3

分類	近江ことば	平均評価点
生業・社会活動	ナオライ・ヤマイキ・カクル・クル	28.0
語句の変形	ユンベ・ハサコマル・ケツラカス・ブエンシヤ ヒトリボシ・ミンゴト・ミダカル	19.2
食事関係	ドロズ・オシイ・カキヤ・ケンズイ・オツケ・シタマワリ	18.5
修飾語	アクショウナ・ヘソコ・キシクル・カタミニ・ツワル・ジラタイ ヒワスイ・カタミウラミ・サクマイガヨイ・ゴンギリメ・ヒンズ	14.2
生活行動	オイネル・キテカス・イテカス・カマドベンケイ・ソバエル シタンス・サイ・キンバル・テネバ・クセ・ゴミョウサン	12.4
社会事象	オオヤケ・クワガシラ	12.0
生活用具等	キリバン・カラス・イジコ・チョウケ	9.2
生物名	カラスノマクラ・ゴメンジャコ・アブロ・オガンダ・シタマワリ	6.2

この表に見られるように、生業・社会活動を表すことばは比較的良好に使われていますが、生物名や生活用具を表すことばは低い値となっています。生物名や生活用具などは全国的に見ても、地域によって違いが大きく、様々なことばがありますが、メディアの発達した今日においては、通用しなくなっているからでしょう。

## 2-4 地域による使われ方

それぞれの地域によって、どれだけ近江ことばが使用・認知されているかを表したものが図-5です。

設問に例示した近江ことば自体に若干地域的偏りがあったことは否めませんが、県東部・北部では比較的多くのことばが使用・認知されているのに対し、県南部では低い値となっています。この地域は京・大阪に近く、古くより交流も盛んで、「上方ことば」や共通語に接触する機会が多いことや、職歴にも影響されているのでしょう。この点に関して、後の同義語の分析でも明らかにしていこうと思います。

同時に、幼少年期に過ごした出身地と現在地を比較してみると、県南東部を除き、ほとんどの地域で出身地の値が高くなっています。県外出身者が占める割合の影響もありますが、幼少年期に身につけたことばが大きな役割を果たしていると言っていいいでしょう。

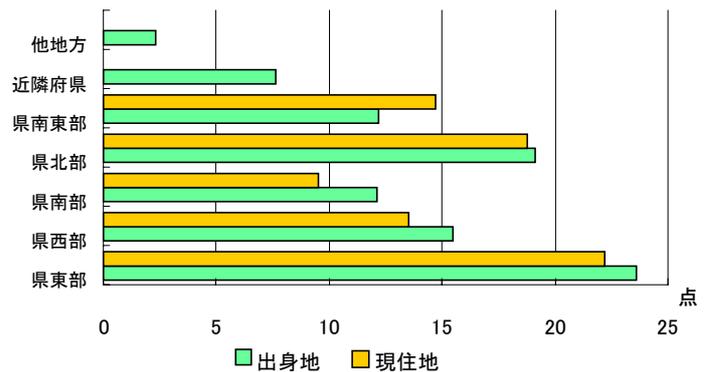


図-5 地域別に見た使用・認知度

ある特定の地域とその他の地域とでは、それぞれのことばに使用・認知している値に開きがあり、特にその開きの大きなものを示したものが図-6です。

ここでも明らかなように、一口に近江ことばといっても地域によって大きく違い、特に東部・北部・南東部には、地域性が強いと評定されることばがいくつも見られました。グラフに示したことばはその一例です。因みに、「サクマイガヨイ(要領が良い)」の他地域は、図-6のグラフには表示されていませんが、0.4点しか得ていません。

その他、表-2に示した下位10語のほとんどは特定の地域のみ偏っており、その地域のことばだと言っていいいでしょう。

逆に、他地域に比べて極端に低いものもありました。「オオヤケ」は県東部以外の平均では12.1点ですが、その中でも県西部では3.8点しか得られませんでした。同様に、「ヤマイキ」は県北部を除いた平均は57.7点を得ていますが、県北部では21.7点にとどまりました。

また、この分析に当たっては、より地域性を明確にするため出身地のみで行い、現住地および県外出身者のデータは除外しました。

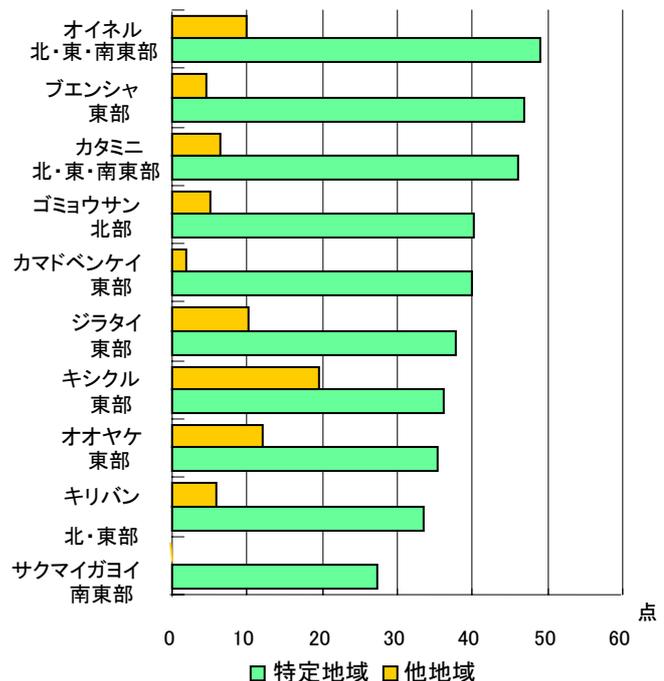


図-6 出身地による使用・認知度

### 3. 同義語の使われ方

設問 2. は、日常会話の中で頻繁に用いられている同じ意味を表すことば(同義語)の使われ方を調べようとしたものです。それぞれあらたまった場やくつろいだ場、上役に当たる人や親しい人など、使う場、相手によって使い分けておられるのではないのでしょうか。そこで、それぞれの使われている頻度について回答していただきました。

しかし、共通語部分がすべて無記入であった方が相当数あり、共通語の浸透度がどの程度なのか、正しく見ることができなくなりました。また、ご自分がよく使っておられると推察できることばのみに、◎や○印を記入されている方も若干名ありました。申し訳ありませんが、その方のデータは除外しました。回答例の表示場所がふさわしくなかったことを反省しています。

それぞれの語群には、「共通語」、「京・大阪ことば」、「近江ことば」を示しましたが、近江ことばの一部には京・大阪ことばと共通するものがあり、便宜上「関西弁」としました。また、それ以外の近江ことばにも美濃地方をはじめとする中京のことばとか、若狭・越前ことばなどと共通するものがありますが、まとめて「近江ことば」としました。

表-4

共通語	関西弁	近江ことば
行かれる	イカハル	イカッサル、イカッサル、イキヤル
あなた	アンタ、ジブン	オマイ、オマハン
上がってください	アガットクレヤス アガットクナハレ	アガトクレンカ、アガランセ
してください	シテオクレヤス シトクレヤス	シテクライ、シテクダイ
来られた	キハッタ	キラッタ、キャンシタ、ゴザッタ、ワシタ
ちょっと(少し)	チョビット	チョボット、チョビント、チョイラ、チョッコシ
そうだから	ソヤカラ、ソヤサカイ	ソヤケニ、ホウヤサカイ、ホヤサカイ
かまわない	カマイマヘン、カマヘン	ダイジナイ、ダイジオヘン、ダイジオセン
ありがとう	オオキニ	オッキニ、オオキニサン
捨てる	ホカス、ホル	フテル
あたたかい	ヌクイ	ヌクトイ、ノクトイ
駄目だ	アカヘン	アカセン、アキシン

同義語使用頻度全体を見た結果は図-7のとおりです。

これを見る限り、圧倒的に共通語が浸透し、近江ことばがめったに使われていないような感じです。しかし、あくまでも推測ですが、共通語欄の無記入回答と他欄の回答状況から勘案すれば、共通語は今少し低い値となる可能性があります。

また、「ソヤシ」・「ホヤシ」とか「アカン」など、提示にはない「ことば」を示してくださった方もありました。これらを含めると、結果は少し変わったかもしれません。

近江ことばで女性の値が低いのは、「男ことば」「女ことば」がある故でしょうか。

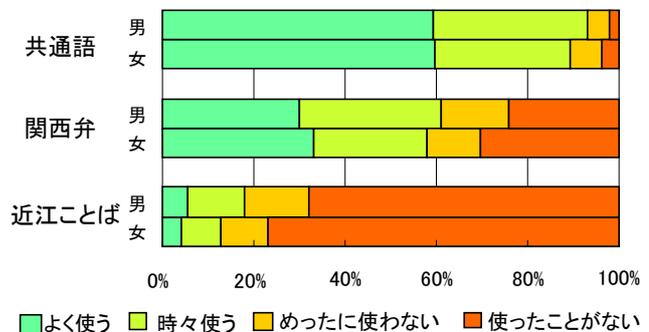


図-7 同義語の使われ方 男女別平均

同義語の一語一語について

◎印(よく使う)と選択されたことばを、共通語・関西弁・近江ことばのそれぞれ上位を示したものが表-5です。

ここでも共通語が強く、近江ことばの劣勢が続いていますが、強い共通語の中でも最下位は「そうだから」35%で、関西

弁の「ソヤカラ」52%、「ソヤサカイ」27%や、近江ことばの「ホヤサカイ」12%を見ると、まだまだこちらのことばが健闘しているとも言えるでしょう。

表-5

共通語	同義語使用率 (◎の%)		
	共通語	関西弁	近江ことば
ちよつと	83	イカハル 64	ヌクトイ 32
ありがとう	80	ホカス 62	チョボット 14
してください	73	カマヘン 61	ホヤサカイ 12
捨てる	71	オオキニ 56	フテル 10
上がってください	69	アンタ 54	ノクトイ 8
あたたかい	65	ソヤカラ 52	ゴザッタ 7

### 3-2 出身地別に見た同義語の使われ方

日常会話において、県外出身者が共通語を主体に使われるのは致し方ないとは思いますが、県内出身者の近江ことば使用率が高くないのは残念です。

ここで興味深いことは、近隣府県出身者の関西弁使用率が県内出身者より低いことです。因みに、近隣府県の大部分が京都・大阪出身者です。

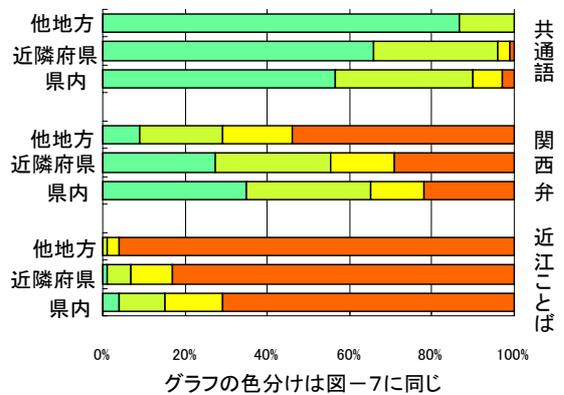


図-8 同義語の使われ方(出身地別)

### 3-3 年齢別に見た同義語の使われ方

40~60 歳代の共通語使用率の高いのが目立ちます。この世代は、社会のリーダー的存在でもあり、共通語の使用を強られる雰囲気があるのでしょうか。また、この世代は、多感な少年期より、そして、生まれて物心がつくや否や TV から共通語が耳に入り、慣れ親しんだのでしょう。60 歳代の関西弁の低いのも関連があるかもしれません。

値は低いですが、10 歳代の近江ことばの使用率が、20・30 歳代より高く表れました。この世代は、他と比べて交流・交友関係がほぼ地域又は県内に限られていることにも関係していると推測できます。

しかし、現時点で交流域が限られているにしても、やがて広い世間で活躍するようになればどうなるでしょう。

人の動きをとめることはできません。地域のことばを守ろうとすれば、世代を超えた、より一層密度の高い地域の交流が必須条件でしょう。

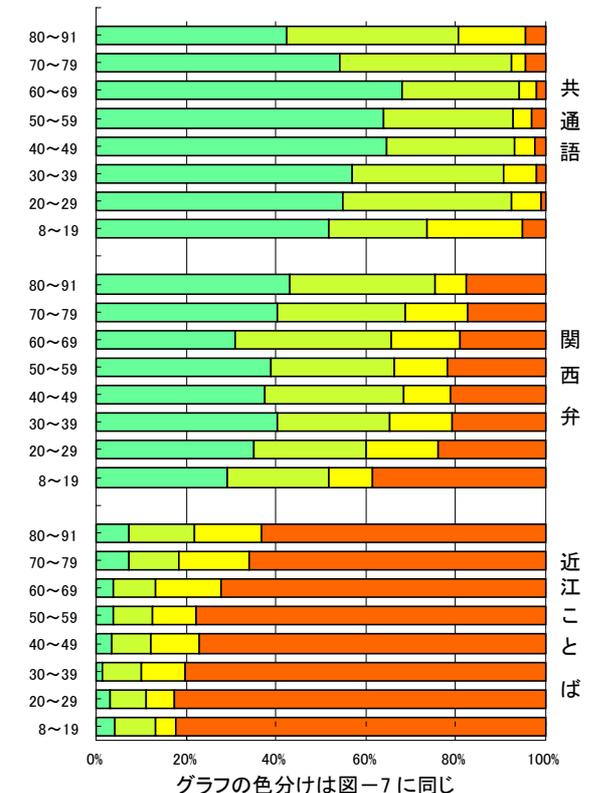


図-9 同義語の使われ方(年齢別)

### 3-4 職歴別に見た同義語の使われ方

共通語に配慮した職種に就かれていた方(G)の共通語使用率の高いのは別として、その他の職種の方の共通語使用率には、ほとんど差はありませんでした。

関西弁使用率で、専門用語の多い職種(E)の方の低いのは、図-11 に示されているように他地方出身者が多いことも影響しているでしょう。しかし、同様に他地方出身者が多い会話の稀な職種(C)の方の使用率は、他と大差はありません。少ない会話の中での会話は、職務から離れた、和やかなものであろうと推察されます。

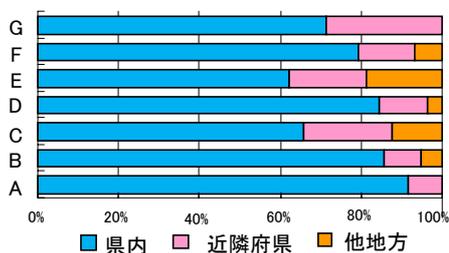
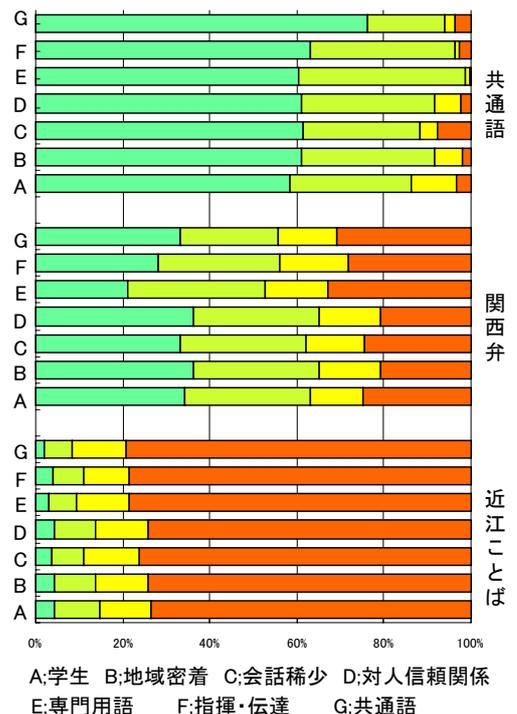


図-11 職歴と出身地



A:学生 B:地域密着 C:会話稀少 D:対人信頼関係 E:専門用語 F:指揮・伝達 G:共通語

グラフの色分けは、図-7に同じ

図-10 同義語の使われ方(職歴別)

使われることの少ない近江ことばにあっても、対人信頼関係を重視する職種(D)に就かれていた方の使用度は、他と比べて、わずかではありますが高い値が出ています。これは、人と人とのつながりは、ことばが大切な役割を果たしているとの認識からであると思います。

人の心をあたたかく和ませる力を持つ近江ことば、このことばが、どんな職種であっても、どんな場であっても、ますます広く多く使われることを願ってやみません。

## 4. 調査・分析を終えて

今回の調査では、滋賀県で使われていることばの使用頻度についてみてきました。結果として、共通語と関西弁が席卷し、近江ことばが隅に追いやられている、ということとなりました。

近江ことばは独特の音韻とやわらかい言い回しによって、人と人をつなぎ、場を和ませてくれます。これこそ近江の人たちの心であり、文化であると思います。その音韻や言い回しのどこに素晴らしい力が秘められているのか、今回の調査では追求できませんでしたが、何人もの方がご意見欄の中で語られていました。今後機会があれば調べてみたいと思います。

終りに当たって、多大の資料やご教導くださった増井金典先生には厚く御礼申し上げます。さらに、地域のことばを集め、それを資料として提供してくださった田原傳三郎様、山中修平様、村田昌平様、ありがとうございました。たくさんの近江ことばを例示してくださった方や調査方法に対するご意見もありました。機会あった折に役立たせていただきます。

多くの皆様方からの近江ことばに対する思いを読ませていただき、大いに励まされました。できるだけ原文に近い形で記載します。ただ、紙面の都合上、数多くの近江ことばやその意味・用法等につきましては、今回の調査から外れますので省略いたしました。

## 5. 回答者の“近江ことば”に対する思い

知らんのばかり。皆使ってない。あったことすら知らない。
あまり使わないことばばかりだった。
今考えてみると、滋賀県も方言の多いところであったと思う。
BBCのTVでこの1年間に近江弁をよく耳にせずいぶん親しんだと思っていたが、この表によるとまったく知らない言葉ばかり…。まだまだ滋賀県人になれていないと再認識した。記載されている言葉はほんの少しいたが中主生まれで中主育ちの友人がたまにされている耳からの方言です。
知らない言葉がいっぱいあってびっくりした。私自身、大津で生まれ、彦根・湖南 etc. 転居・転校したので多くの言葉を知ってるつもりでしたが、意外でした。
以前は、河内・大和・湖東と似通っている言葉があると感じていましたが、今回の調査ではそういう面が意図的に外されていると感じました。邪推でしょうか。
ブエンシャは、私の母がよく使っている。64歳
湖北言葉：せんどした、おせんどさん、だしかいな、じんべんな、のでな、シテヤンス、ハサカマル、ヒガイソ、ヘデコ、ヘドコ、イカール、オマン、シトクナイ、ゴンシタ、ホンデ 北の裏隣をキトロといひます。キトラ古墳は北裏からきたと聞き、共通するものを感じた。
東北や沖縄の言葉は、ほとんど外国語のようだと思っていましたが、今回の例に出ている近江ことばもその域です。皆さんはどうですか。おもしろいですね。
私は八日市出身だが、隣の近江八幡とは少し言葉が違う。友達の中には湖北の人もいて、聞いたこともある言葉だが、私は使ったことがなく、近江ことばといっても地域によって違うのだということを感じる。
近江以外に近隣県には京都しか行ったり住んだりしたことはないが、京言葉に若い頃近親感を覚えた。ここに出てきた方言は母(T14生)がよく使うのも少なくなかった。現在の私には、関東の方の言葉も混じっていて方言色が少ないと思うが、同窓会ではよく口に出る。美しい響きの方言は残ってほしいと思う。
成人になってから滋賀県に住むようになったため、方言はあまり使いません。イントネーションは少し関西弁が混じっているときがあるようです。(北海道に住む友人が京都弁みたいだと言っていました。)20年以上滋賀県に住んでいても聞いたことのない言葉がほとんどでした。
ゴメンジャコ：日野では、メダカより小さい魚のことをメメンジャコといひます。守山ではインゴロモチ、モグラの事。カマドはおくどさん、八日市では「ゆがんでい」を「いがんでい」「えがんでい」といひます。◎○△×方式は記入しやすいですが多くの方言を集めるなら、標準語を書いて、どういひか、自由に書いてもらったほうがいひのではないかと思ひます。
両親が他県出身で、近江ことばは分からないことばかり。でも、きれいな言葉が多いと思ひます。
微妙に異なる：ヒワスイ→ヒワソイ、ユンベ→ユウベ、キハッタ→キヤハッタ
野洲で子どもを連れていると、「きさんじさんやなあ」と言われて、まったく何のことか分からなかった。子どもをほめる言葉「かしこい子ですね」ということが後に分かった。
野洲の人は気にしないでと言うとき、「だんないだんない」と言う。
思索する事を→コウツトと明治生まれの父が言っていた。
近江にずっと住んでいひますが、先人たちが使っていて言葉も含めて、ずいぶん多様な言葉があるのにびっくりです。社会人になり、標準語を話すようになり、ほとんど近江ことばを使わずにいひますが、「響きのいい」言葉は残しておきたいですね。近江ことばを使う方もだんだん少なくなり、一寸淋しいですね。会話言葉にも興味があります。同じ近江でも湖北・湖南では分りにくいものもあるのでしょうか。
大阪から滋賀に来て「ほっこり」といひ言葉を知ったのが新鮮でした。
県内でも都市部(例えば彦根市の旧市街(城下町))とその周辺の農村部では距離が近くても、かなり言葉が違う。
地方独特の温かみのある言葉だなあと思ひました。知らない言葉もたくさんあるなあと思ひました。
意外と知らない言葉が多かったのでびっくりした。
男言葉と女言葉がある。県東部といひても、日野と彦根ではずいぶん違う。
今回のアンケートで、“近江ことば”という分類を知りました。今回のアンケートの言葉の種類は、私が現在住んで育った県南部(大津・草津)ではあまり使われていない言葉のように思ひます。×の記号が多く、“近江ことば”を知らないで生きてきたのに驚いていひます。
1)の問題でほとんど知らない言葉だったのがショックでした。学生時代京都にいたので、妙な京都弁も混ざっているかもしれない。有難うございました。
「ほかす」といひ言葉に、初めは、何か分かりませんでした。滋賀の昔からの言葉が、こんなにあるとは思ひませんでした。
出身が18歳まで新潟なので、関西弁はみんな同じだと思ひてきいていひましたが、それはイントネーションが同じということで、単語の違いにまで気づいていひなかったけど、ずいぶん後になってからそれぞれの地方によって言葉の違いに気づきました。
83歳の父と79歳の母がいますが、あまり聞いたことのない言葉が多かったです。私がよく使う米を「カス」といひ言葉は、子どもには不思議なようです。米を研ぐという意味です。父や母がよく使っていました。
親の代から入り人なので、あまり使ったり聞いたことがありませんが、小学校時代の男の子は語尾に「～やんけ」とか使

<p>っていたように思います。</p>
<p>さらびん(新品)は近江ことば？ おばあちゃんが言っていて、よく覚えているものは多くありますが、自分が使うとなると、かなり限られますね。しまける(小雨よりも細かい霧のような雨)～してらる(していらいしゃる)は関西弁？ ぎょうさん(たくさん)は関西弁？</p>
<p>滋賀県に転入して30年足らずになるが、ほとんど近江ことばをきいたことがない。</p>
<p>言葉の経歴 ～22歳 博多弁、22～57歳 大阪在住、最初は若い女の子に博多弁を笑われ、標準語を話す。35年で標準語+大阪弁に至る。57歳～77歳 津市在住、60～65歳まで地元会社勤務、近江ことばに接するが、京都弁に近いな、と思った。オオキニは抵抗なく使った。</p>
<p>この調査票を手にして、明治大正時代の祖父母・父母の生存中に交わした会話が懐かしく思い出されましたが、現代では話すことはなくなりました。</p>
<p>若い人への世代交替もあって昔からの身近な日常言葉がなくなってきました(標準語の使用)。昭和20年前くらいに生まれた方々であれば、地域～地域でよく使ったものです。慰安は子供同志の遊びは全くなかったため、身近な近江ことばは時代とともに無くなりつつあります。近江(びわこ)に生まれ育ったものにとって大変淋しい思いです。この懐かしい言葉のアンケートはよかったと思います。</p>
<p>大阪から嫁いで来て、だんだんこちらの言葉が移ってきました。義母が旧浅井町出身なので、そちらの言葉を使っていると思います。チャンス・キャンズなどの言葉は、丁寧な言葉なのかそうでないのか分からず、感覚的に受け入れづらいため、自分では使えません。上の表の2段目(又は3段目)の言葉は、大阪でも使っているので違和感はないです。⑩のフテル、⑪ヌクトイなどは柔らかい感じがするので好きです。「だんないほん」といわれた時に、全く意味が分からず、どう返事したらよいか分からなくて、何回も聞き返しました。</p>
<p>私の子どもの頃に使っていた言葉もありましたが、大人になるにつれ田舎から都会に出るときやはり標準語に近い言葉を使用していたと思います。結婚して子どもができてからも子どもには標準語に近い言葉で話すようになりました。今思うと、近江ことばは温かい気持ちで対話ができると思います。京都に8年ほど住んでいました。京都言葉は独特ですね。</p>
<p>滋賀県に住んで27年になりますが、最初の頃は「何を…ヤス」という言葉が気になっていました。やさしいのか、へりくだっているのか、本当の気持ちが分かりませんでした。今は理解できますが。</p>
<p>近江ことば大好きです。同世代の方に比べてかなり使っているらしいです。子どもたちも小学生の頃はよく使っていましたが、成長するにつれ標準語になり、居住地域に染まってきており、少し淋しい気もします。そんな私でも、1)の表では半分にも満たず残念です。北部～北部に嫁いでいるので仕方ないのでしょうか。今後も近江ことばを大切にしたいです。</p>
<p>大阪生まれで大阪育ち、滋賀県に住んで44年になるが、近江ことばは殆ど聞いたことがないか、会話で聞いたことがあるが使ったことがないことばに出会った。これは津市に住み、職場の関係であろうと考える。</p>
<p>明治生まれの父母共にこの地(県南部)に生まれ育ち、そして今も生きる私は生粋の近江人と思っていたのですが、まさに“井の中の蛙”で、ここにあげられた“近江ことば集”の多くは聞いたこともないような“これも近江ことば”?と思うものがたくさんあります。小さな山村で育った私は日常の言葉以外はラジオだけで、昭和30年高校入学時に少し町へ、そしてテレビが普及し、人の流れも変わり、日常語も変化していき、今はあまり使われなくなった言葉もたくさんあることに気づきました。</p>
<p>祖母や母が京都・大阪へ奉公に行っていたので(昔は娘になると町へお手伝いさんに行った)、その影響か、今で言うテレビで使われている「関西弁」とは少し違う、もっと滑らかで清らかな「京言葉」風の滋賀弁を使ってきました。今はずいぶんと雑で下品だと思います。又、母の里はマキノ町西浜で、この地図でいうと「北部」ですが、今住んでいる安曇川とは違って、もっと素朴で温かい言葉で話します。しかし、同じ「北部」の長浜出身の友人はアクセントも違い、ぜんぜん違う話し方で言います。高島弁で最も顕著な例は「～け」という語尾の使い方です。</p>
<p>自分の知らない言葉が多く、驚いた。普段あまり意識しないが、やはり自分の育った土地の言葉が失われてゆくのは少し哀しい。</p>
<p>1)の問いはほとんど理解できません。2)の多くの言葉は使いませんが、意味は分かります。 ※滋賀に住んで45年です。</p>
<p>「ことば」には、男言葉、女言葉、又、年寄りの言葉、敬語、対象者同志の言葉、等々あります。関西の私は、ついつい九州・長野・関東のナマリに引き込まれてしまいますが、テレビ・映画を日常的に見るようになってからは「地の言葉」は、使わなくなってきたように思います。</p>
<p>関西弁に家風が加わって、「そぞす」とか「しておくれやす」とかいう「京都ことば」が商人には使われるが、農業をされていると「まよまよ」とか「おまはん」が多い。</p>
<p>特になし、今ではほとんど標準語になっているので、話し相手も、地方とかが分からない。</p>
<p>長浜の近隣には、京都言葉の変形したものと考えられるものがある。きゃんす・やんす、の活用</p>
<p>表現に少しずつ違う言葉をつかっています。(してください→しとくなはれ、かまわないう→だんない) 法事のときの台所でおばあさん・おばさん連中の話には本当にいろいろな言葉がもっておりそうです。</p>
<p>2)の中には、少し違うと思うものもありました。しとくなはれ、きやはった、かまわん、だいない、のんのい、あかん</p>
<p>私の住む津市では旧の津市は女性は比較的京言葉に近い方言を使っていたように思います。いらっしやい=(おいでやす。お帰りやす)早くいらっしやい=(早よおこない)など。第1回の方言のアンケートがあれば読んでみたいと思います。10年位前に自分たちの親の方言の聴きとり調査があり、この地方独特の話し方をしていたのを懐かしく思い出します。方言は汚いからと標準語に近くなっていく。また、若い人たちの分からない言葉は情けない気持ちであります。</p>

「近江ことば」大好きです。特に、外で仕事をしている人に「おきぱりやす」。川で洗い物をしている人に「お洗いやす」。夕方まで仕事をしている人を見たら「早よしもとくれやす」人としゃべっていて別れるとき「ほなごめんやす」。本当に大好きです。
京都の影響があるのかな?しんどい・こらえてやって・もんでくる・かまへん・どないなん、などなどをよくつかっているけれど、これも方言?彦根の古い集落に生まれ育ちました。ゆくゆくは宮組織の世話役もしなければなりません。しかし毎日京都に勤めに出ているので京ことばや共通語になれました。
彦根の古い家に嫁いで来ました。民俗学を学んだのでナオライはわかります。また、日本語教師なので、共通語に訓練されてきました。大阪弁がかなりきつかった。近江ことばは京言葉に似ている?しかし彦根以北では福井言葉のイントネーションに近いこともある。語尾を引っ張る。例:医者さんの言う事聞かなかんでな~あ~,それだな~あ~。湖北木之本のイントネーションで福井の「うなり」に近いものがある。地理的に近いからかな。今庄からのお嫁さんからの影響か?
だんない→かまわない、うい→申し訳ない、たい→ちょうだい、ほにゃたら→そうしたら
私は今、社会科の教師をしています。授業中はおそらく関西弁と江州弁と共通語が交っていると思います。生徒と1対1で話すときは江州弁丸出しのときもあります。ほっとくと、どんどん使われんようになると思うので、意識して江州弁(近江ことば)を使っていると思っています。
草津生まれの草津育ちの祖母(故人)は、「~しやい」「~来らった」「~しらった」「ほうけ(そうか)」「ちようずを使わい」のような言葉をつかっていました。
「(私に与えて)ください」の意味で「タイ」という言葉をよく使っていました(今も使う)が、今回の調査対象に入っていないのが残念です。
私が生まれ育ち、現在も住んでいるところは、八日市駅に近くの商店街の中で、昔から商売をしてきた家です。親戚も田舎(農家)には1軒もありません。5kmぐらい離れた在所の農家のおばあさんなどから聞く言葉は、同じ八日市でも町中では使わない言葉があります。町中と田舎とでは、ずいぶん使う言葉が違うなと思っていました。
先日私の住んでいる地域の方言をまとめたものを増井先生のお宅に持参しましたら、こちらの取組みをお聞きしましたので、レポート致します。後日、その資料をコピーして郵送させていただきます。
1~2頁は、農村の使用例や特殊な用語が中心であり、町屋に住んでいた者にとっては、ほとんどなじみがない。商人・職人も含めて町屋の使用例も比べたほうがよいと思います。
県外より大津市内ニュータウンに住むようになって40年になりますが、近隣の住民も同様に移住者が多いため、又仕事も県外であったせいか、なかなか「近江ことば」に接することがなく、色々な言葉があることを知りました。
このアンケートに答えることで、この言葉が「近江ことば」と初めて知りました。私は使っていないが、アガツクレヤス、シテオクレヤスなどは母がよく使っていたのを思い出します。「近江ことば」は、何か柔らかい響きがあり、いいものだ改めて感じました。
私からしても、大分昔の言葉だと思いました。ニュアンスは分かりますが、微妙に使い方が違います。
北部ですが、2)⑤では、「きゃーた」が一番使います。
気安い間柄であれば、使ったほうが親しみがあって面白い。京言葉に近いものはやわらかい。地域の歴史とどうつながっているか分かるとき興味がわく。
来られた…キヤハッタ、駄目だ…アカン など空欄があれば尚よいと思う
昔、祖父母が使っていた言葉で、知っているも日常会話で使わない言葉 があります。
都市化が進んだ地域(転入者が多く若い世代が多い)なので、近江ことばはほとんど聞かれない。子どもの間では滋賀弁で話すことがあるらしい。
分からない言葉が多い。一見、きたなく聞こえる。
私は18歳頃まで水口町に住んでいて、その後大阪へ移り、26歳頃から野洲市に住むようになり、現在に至っています。たとえば、「かまわない」という言葉は、子どもの頃「だんない」といい、10歳代後半には「かまへん」と言っていたような記憶があります。又、大阪では「かめへん」と言っていました。野洲に住んでからは、「かまいません」「かまへん」と言っています。又、こういう言葉も狭い地域ごとに微妙に違って、しばらく話すと、「あんた信楽やろ」とか「あんた甲賀やろ」とかだいたい分かりました。言い方は同じでもイントネーションの違いでも地域差があったと思います。更に、「信楽のどどこやろ」というのも分かりました。昔は、今ほど「入り人」(新居者)もなかったためか、地域に個性があったと思います。
“近江ことば”は育ってきた環境にも大きな影響があると思う。私の祖父母は近江ことばで会話していたが、荒っぽい感じがしてあまり好きでなかった。また、私自身「幼少の頃疲れた」という意味の言葉は「えらい」というものだと思っていて、京都から転校してきた女の子に「あ~えら、えらいね」と言ったら、「どういこと」と言われ、通じなかったことを覚えている。学生の時、京都に通学していたので、京都の友達と接することが多くなり、近江ことばより、ほんやりした京ことばに慣れてしまった。今は嫁いだ先が少子高齢化の進んだ地域で、言葉遣いも例えば「あんないのちに」「なえてかなんな」とか独特の言い回しが多く耳慣れない言葉にとまどうことも多く地域性のあることやその家々の特徴が残っているのだと感じる。「近江ことば」も世代が変わるにつれ使われることも少なくなると思う。
全く聞いたことのない言葉が多くあり、驚きました。調査票に書かれている“近江ことば”がどの地域で使われていたのか(いるのか)興味深いですね。私は県南部に住んでいますが、守山から野洲に変わって、微妙な言葉やトーンの違いがありました。その辺も分かるとういいですね。
大野学区では、「ノウ」という言葉をよく使っている。「そやのう」=「そうですね」「そうですね?」「あのう」=「あのねえ」など。

<p>自分が幼少期に祖父母や近所の人たちが使っていた言葉が、次第に使われなくなり、随分消えてしまったように感じる。今は使っていない言葉も、なんとなく意味が判ったりする言葉もあり、懐かしさを感じた。このままでは、標準語ばかりになり、暖かみのある言葉が無くなってしまわないかと危惧する。昔の言葉には、歴史や当時の社会生活や文化が凝縮されていると思うので、今の共通語を捨てる事はできないが、例えば、伝承する方法を考えるなど、歴史や文化の連続性を保っていく必要があると思う。</p>
<p>近年あまり使ったことはないが、以前「ヨイシ」という言葉を聞いた。特に百姓が非農家に対し、「あんた等(のどこ)は「ヨイシ」やから、こんなことせえへんわな…」とか「知らへんわな…」とか言われた。何となく嫌だった記憶がある。</p>
<p>①行かれる:行かーる ②あなた:おまん ⑤来られた:来らーる ⑧かまわない:かまん ⑩駄目だ:あかん こたつ:ばんとご飯:ごぜん 夜:よまり いらっしゃい:きない 小さい:こまい 大きい:いかい 来る:きやる かまわない:だんない してなされる:してらる いらっしゃる:いら〜る ゆっくりしてください:だしかいな</p>
<p>野洲・草津方面では、そうですね、というとき、(そやなーし)と、なーし を言葉の尻に使う。又、(そやほん)とも言う。畑を耕す事を「はたけ掘ってくるわと言います。</p>
<p>ミンゴトやワシタなどの言葉は少し相手を見下して、高齢の方が話します。</p>
<p>おじいさん・おばあさんが使っていた言葉を最近では使われなくなってきたと思います。「新県民」が増えたせいでしょうか。</p>
<p>私は県東部で生まれ育ち、16年ほど前、同地域内の隣町に嫁ぎましたが、すぐ近くの地域なのに、こんなにも言葉が違うのかと、驚いたことがしばしばありました。(ex.昼寝しなさい→昼寝(ヒンネ)サイ→昼寝(ひるねい)シヤイとか)。交通とか産業など地域のもつ背景や、土地の人々の生活仕様により、ずいぶん違いを感じます。町から外へ出ないお年寄りが多いと古い言葉が子へ孫へとよく残るものだと思います。同居家族が多いのも一因です。このアンケートに足りないくらい「こちらのことば」まだまだあるので、消化不良気味です。</p>
<p>草津に居住して28年になるが、時々地元の方の方言が理解できないことがある。</p>
<p>近江のことばも当然ながら隣接する地域(府県)の影響を大きく受けて、湖南・湖東・湖北・湖西では表現・ニュアンスが異なるようです。昔は結婚なども地域だけでなく、岐阜や愛知などとの交流もあったり、城下町・宿場町など、その土地の特徴による表現の違いが、語尾の変化などに現れていると感じます。隣接する府県のことば、アクセントなども調べてみると面白いのではないのでしょうか。</p>
<p>私は生まれも育ちも現在の住まいも大津の中心部。実家は大津の地に住み、50年ほどの旧家だけれど、今回の調査対象になった言葉はほとんどつかっていない。どちらかというとも京都のことばに近く、生活や風習も京風に近いといわれる。県の北東部では以上に上がったことばをしばしば使われているように感じる。生活習慣や、また、冠婚葬祭のならわしなども大津(特に京阪沿線)と草津より北、今津方面などずいぶん違いを感じる。滋賀県民は鮒ずしを食べるといわれるが、そんなことはないし、食生活においても、大津はずいぶん京都の影響を受けているようで、ずいぶん違うようである。</p>
<p>近江の南部の農村に生まれ住み続けているので、昔からの集落での言葉は体にしみついている。標準語も社会人となってから習得したので、状況に応じて両方を使い分けることもでき、重宝している。</p>
<p>ほとんどの言葉が聞いたことも使ったこともなかった。</p>
<p>「となりのAさん(家)へ医者さんがござった(来られた)。」というような言葉、今では70歳より上の方が使われていて、だんだん方言もなくなってきているが、集落(字)内での会話は40歳ぐらい以上では方言まじりで話すことが多いと思う。方言ことばはあたたかくてほっとしますが…。</p>
<p>大学が彦根で湖東、湖北の方と話す機会がありましたが、同じ県内で同じ世代なのに相手の話されている内容を理解できないことがあり、大変驚いたことがあります。ex.「きやんすのか?」←来るのか?の意味。今回の一覧表の言葉もほとんど聞いたことのないものばかりで、驚くばかりでした。</p>
<p>今回の調査をNHK「おうみ610」で知りました。私は、54歳になる被調査者の息子ですが、以前から母の使う方言に興味を持っておりました。それは、私が全国組織の仕事場に就職したため、特に各地の方言を聞く機会がありました。その中で自分が生まれた郷土のことばに関心が生まれたのかと思います。そのため、以前から母の使うことばを記録にとっておきたいと思いつつ今日に至ってしまいました。たまたま見た調査の募集番組で「おっ」と思い、早速母に問いかけましたところ、は母も興味を持って応えてくれましたが、回答票にあるように、県西部(新旭町)では耳にしないことばが多く、滋賀県にも結構沢山の言葉があると判りました。また、私自身も調査票を見ていると、例えば「オシイ」(おつゆ)とありますが、私たちの親の世代(70から80歳以上)では「オシ」と言っております。カタカナ文字だけではアクセントで違うと思いますが、調査結果の公表を楽しみにしております。また、「滋賀県方言語彙・用例辞典」というものがあることも知りましたので、図書館で調べてみます。</p>
<p>京都に近い朽木(特に西地区)では公家ことば(例)そち、が残っていたり京都弁に近い感じのことばが残っている。近江商人ということから大阪の船場の問屋あたりでつかわれている言葉もよく聞く。又、高島市内でもある特定の地区でしか使用していないことば「〜したんす」とかは独特であると感じる。祖母(生きていたら100以上)が独特な言葉使いをしていた。</p>
<p>滋賀県以外で使うと少しはずかしい。</p>
<p>言葉尻に「ケエ」を付けることにより内容を曖昧にし、人間関係を曖昧にしている反面、意思表示を避ける巧みな話術であると思っています。</p>
<p>高校までは県南東部に住んでいたが、卒業後は県外で過ごしたため、いわゆる方言はほとんど使わず忘れてしまった。生家に帰ると知らず知らず使っているかもしれないが、上表1の言葉はかなり特殊で知らないものが多い。</p>
<p>昭和20年頃(子どもの頃)少しばかり富山県に住んでおりましたのですが、富山県も「オツケ、チョウケ、ユンベ、ヤマイキ、オマハン、チョッソシ」等々よく使いました。北陸と近江、似た言葉 あるものですね。</p>

<p>生まれ育ちました犬上郡甲良町や愛知川町は近江商人発祥の地五ヶ荘に近かった為か、日常会話のテンポやイントネーションは京言葉と全く同じで、おいでやす、おおきに、そうどすか、おきばりやす、お寒おす、しんどいどすか、かないませんな、などが母たちの日常会話でした。50 数年前ですが、犬上郡甲良町下之郷の藤谷一海先生(高校国語)が、近江の方言を色々と調べられていた事を記憶しています。</p>
<p>言葉について県内でありながら住むところによって異なるのだと驚いたのは高校に入ってからです。中学校までは同じ町内でしたからそれが当たり前として生活していたのです。高校に行くとき語尾につく「…やし」「…らる」「…け」などを耳にし、気になりました。信楽や草津の方たちでした。子どもの頃、夕方であう人たちに母が「おしまいやす」と挨拶していました。仕事を終え、ホッとするとあたたかい方言だと思っています。○息子たちが会話で、相手のことを「自分」と言います。気になります。○語尾に…やん とつけけていることに気づきました。…したら あかんやん、…したら いいやん、「そのような事おっしゃらないで よいことですね」→「そんなこと いわへんかて ええやんか」「そんなこと いわへんでも いいやん」方言に置き換えるのは楽しいですね。大阪・京都へ勤める人が多かったので色々混じっていて、どれが近江弁なのか良くわかりません。</p>
<p>なつかしく近江ことば調査回答させていただきました。湖北の言葉は分かりませんが、湖西で生まれ、大津で育ち、草津へ嫁ぎました。私が思うには、近江ことばも地域により違いがあり、湖西では…シヤス、…シヤンス、大津では…オクレヤスなど京ことばの影響があると思われます。草津では…シテクライ、シテクザイとなります。又、交通の便が悪かった昔は川が地域の文化を分けたように思います。草津に嫁いで、特に生活習慣や風習が瀬田川を越えると違うと痛感しました。私の思いは(大きい)川を越えると文化が違うようでした。方言、近江ことばといわれるのも、川を境に大きく違ったのでは…と思っています。</p>
<p>幼い頃、母が使っていた言葉で印象深いもの ・オシマイヤス(夕方、外で近所の人に会った時) ・ケナリイ(うらやましい) ・スイな(めずらしい)</p>
<p>私じしんは県東部生まれ(五箇荘)小学1~6年県東部(蒲生町)、女学校~高3迄日野へ通い、京都4年、日野で5年程勤め、結婚後信楽へ帰って45年程になります。家庭環境が教員だったので、どちらかと云えば標準語に近かったように思いますが信楽へ帰ってきた時、近所の人と話す時ほうけとかそやしのうという(け)と(の)の音(オン)が耳について仕方なかったのですが、今ではお年寄りと話しても違和感はすっかりなくとけこんでいます。信楽は陶器の町、女の人も男と同じ様に荒い仕事をするのに上品な言葉使いでは追っつかなかったのでしょうか。ただ「おなり」とか「けんずい」とか「つる」という言葉等すぐ理解できないこともありました。</p>
<p>昨年京ことばが新聞に毎日ひとつずつのっていた。知らずに使っていて、これ京ことばだったの?と思うことがあった。又、話しことばを活字にすると、全然わからなかったりと、一人で笑ったりしていた。上記のことばも、ちょっと意味合いの違うものもあるかもしれません。</p>
<p>選択肢に“聞いたことがある”もあればもっと情報収集できたように思います。“自分で使うか否か”を問われると、滋賀県で生まれ育っていない者としてはほとんどが×になってしまうので意味を感じない気がする。「滋賀県に何年住んでいるか」も参考になってくれると思います。</p>
<p>私は野洲に生まれ、現在は守山に住んでおりますが、時々聞いたこともない言葉を耳にすることがあり、近江のことばはおもしろいなあと感じていました。今回の調査結果はたいへん興味深いです。</p>
<p>「自転車」の呼び方も、この辺りでは「チャリンコ」や「チャリキ」と呼んでいますが、名古屋の方では「ケッタ」と呼んでいます。身近な物も地方独特の呼び方がある、おもしろいと思った。</p>
<p>下段の言葉は、今思えば明治生まれの方がよく使っておられたように思います。</p>
<p>一首つくりました 行き交いに「お気張りやす」は 湖抱く 近江の野良の ねぎらい言葉</p>
<p>聞き慣れているのに、なぜか私には「コトバ」として使いにくい「云い方」がいくつかあります。その一つは、「ホーヨヽ(下る)」又は「ホーヨヽ(上る)」、強調するときは「ホーヨヽ、ホーヨヽ」と2回くり返し、さらに「ナ」や「ヤガナ」がついて、「ホーヨヽナ、ホーヤヽガナ」いずれも「そうですよ、その通り、そうでしょう」など、同意や肯定に使われると思うのですが、男女により少しイントネーションが異なるようです。その他に、「ホンデナア」「エーホン、エーホン」「ホンナモン」「ホツカイナ」などホのつく言葉が今住んでいる大津、唐崎地域の年配者が使うのを、よく耳にします。もう一つ、どのような場面やタイミングで使われているのか、また正確な意味も未だに理解してない言葉に、「ヨロシューオアガリヤス」という云い方があります。この「ヨロシュー」は「宜しく、宜しいどうぞ」ではなくて、問題なく、しっかりと、気持ちよくなどの意味ではないかなと。いかにも近江商人が使ってきたような感じがするのですが、これ、「近江ことば」なのでしょう。</p>
<p>今、私の住んでいるところは高島市マキノ町知内です。調査票の県北部と県西部の境界にある百瀬川が集落の真中を流れて琵琶湖に注いでいます。昭和30年の町村合併で旧百瀬村、西庄村、剣熊村、海津村が合併してマキノ町となりましたが、江戸時代の藩の支配地の関係があるのか、旧海津・剣熊地区と旧百瀬・西庄地区、又南隣の今津町川上地区とは日常の会話でも大分違います。昭和30年頃に老人の方が使われていた言葉をいま使う人はずいぶん減ってきましたが、地区の言葉はそのまま残っているように思います。漁師の多いところでは、昔から言葉が荒いといわれてきましたが、今では旧町で平準化されているみたいで、知内の子供達が特に口が悪いようには思いません。多分テレビの影響もあると思います。私達湖西の言葉は沢山の人が代々京都や大阪へ奉公に行き、その言葉を持ち帰ったとかで、元々の言葉の中に入り組んで方言となったものもあると思います。</p>
<p>母が新潟出身ですが、共通の言葉がありびっくりしました。北陸の方言も混ざっているのかもしれない。けなるい(うらやましい)がそうでした。</p>

<p>⑥は我が家では父が「××ンカス」と言っていた。⑧は「ダンナイ」をよく使う。あと、まずいことを「アンナイ」とうもろこしを「ナンバ」気を遣うことを「キツツナイ」疲れることを「センドスル」とか言う。小さい時、よく祖父母に面倒見てもらっていたので、むかし言葉を知っているほうだと思っていたが、アンケートではじめて知ることばが多くておどろきました。県東部エリアに旧米原町が入っていますが、言葉的には東部エリアではないと思います。彦根と米原ではイントネーションがぜんぜん違います。米原は長浜・岐阜よりだと思います。あと「ギョウサン」が若い世代につたわらなくて最近おどろきました。</p>
<p>あたたかい雰囲気や伝わる言葉が多くあるので、大切にしていきたい。</p>
<p>認識違いかもしれませんが、自分の住んでいるところは、・イテカス→こらしめる ・カクル→土手などを削る ・サイ→ご飯のおかず ・ブエンシャ→ブゲンシャ と言っているように思います。</p>
<p>調査の以外でよく使っている言葉で思いついたのをあげておきます。日ごろ使っている言葉で、標準語に簡単に置き換えられないニュアンスを多くもっている事を感じます。例えば“たぼとく”はたんに“残しておく”ではなくあとの楽しみに大切に残しておくときに使います。そんな言葉がほかにもたくさんあるように思います。奥深い近江言葉を大切にしたいものです。また今回の調査票の中で1字違いで使っている言葉が多くありました。少し地域がずれると微妙に変わってくるのですね。</p>
<p>大津から八日市に嫁いできて50年になります。当初は八日市生まれのお姑さんに「おまはんに こんなにしろもうて、おとましいことな一し」等と言われて。恐ろしいことと言われたと思ひ心を痛めたものでした。そういうことがあって、主人が湖東地方の方言を集めて、教えてくれるようになりました。今では大津の友人に八日市弁、上手になったね、と言われてます。方言を汚い言葉と勘違いしている人があるかもわかりませんが、気取らずに土地の言葉で話す人からは、心のぬくもりが伝わってくるようで、好きです。NHKの朝ドラは、セリフも方言が多く、ドラマの内容を面白く豊かにしています。毎日欠かさず観ています。</p>
<p>18歳までは現住所より2km程の所でしたが、その後就職・結婚と40年余り他府県に住んでいたため、どうしても幼少時の言葉が遠ざかってしまいます。と同時に、テレビやラヂオによって全体的に(一般的、自分自身ではありません)標準語に近づいているように思います。</p>
<p>幼少の頃最後の言葉尻に「ケ(そうケ)」とケを良く使い、言葉が汚いと言われ、できるだけ使わなくなり、今回のアンケートに馴染み言葉がありません。少し淋しく思いながらお役に立てず残念です。</p>
<p>近江ことばと思っても、京ことばがかなり入っていると思います。(例えば しておくれやっしや、そうどすか ようきとくれやした) など。最近になって方言?と思えるのを少し書き出しましたが、大阪弁のようなものもあり、純粋とは言えないのかなと思えます。私が守山から野洲へ嫁いできたとき来たときに(昭和28年)田んぼで働いておられた隣のおじさんにおきばりやすと言いましたら、へいこらと返事をされました。(少数の人でした) 今でもあのことばは忘れておりませんが、こらにあったことばでしょうか。</p>
<p>同じ県内でも、地域によってずい分と方言はちがうと思います。同じ市内でさえも、旧町によって使う言葉にちがいががあります。</p>
<p>滋賀県湖西地方の若い世代(10~20代)は、下記のような特徴があります。行かれる→行かーる 召し上がる→食べやーる 来られた→きやーた おられる→やーる</p>
<p>湖南から湖西へ嫁いで来て初めて聞いたことばがあります。犬が吠える→ふける 飲み込む→のぐる 一番ビリ(運動会など)→ゲベ 等々 (年配の方が良く使われるのは、ヤンス、タンス)</p>
<p>相手(年齢、男女別、親密度)によって、ことばは少し変わることがある。同年齢程度の相手の場合、自分のことを「ワシ」という。主に高齢の男性。男性が複数の相手には、「お前等」→「オマイラ」「オマエラ」と、ラをつけます。何何してはいけない場合、最後に「ナ」をつける。若年になるにしたがって標準語を使っております。</p>
<p>水口町宇川地区においては少しニュアンスが違うことばが残っています。例→ワレ</p>
<p>生まれてから、永源寺、八日市に住んでいます。が、まだまだ沢山の「近江ことば」が使われています。追求すれば奥深いと思われれます。</p>
<p>TV等の普及で、各地方の方言等が失ってしまわれたように思う。物言の表現、ほめ言葉等が、人生の先輩が亡くなられるのと一緒に失われていくように思われる。その地方の言葉(方言)が泥くさい扱いにされているようで大変残念に思う。</p>
<p>近江ことばは、我々が住んでいる(真野)の文化と思っています。今、若者が短縮して言葉を発しておりますが、「ナンセンス」に思う。地域での集まり(老若)では、おおいに近江ことば(真野弁)でしゃべっておりますが、楽しいものです。</p>
<p>このアンケートで、色々な「近江ことば」を知りました。おもしろいですね。</p>
<p>同じ守山市の中でも少々アクセントのちがいなどがあって、おもしろいものです。</p>
<p>上の欄の赤○印は4年前104歳で亡くなった祖母がよく使っていた言葉です。参考までに印しておきます。とても懐かしく思い出しました。</p>
<p>今回の調査で聞かれなかった言葉が、なおたくさんあると思います。今後も続けて調査してください。なかなか興味ある調査ですので、楽しみながら協力させて頂こうと思います。母や祖母の日常使っていた言葉を懐かしく思い出しました。こうした形であらためて聞かれると、実にけったいな言葉を使っているものだと思感しました。</p>
<p>滋賀県内でも湖岸ちかく、及び、漁港、漁民の人たちの言葉が微妙に違うと思うのです。</p>
<p>草むしりや畑仕事をしておられるそばを通るとき、おきばりやすと声をかけて通り過ぎる。夕方出逢うとおしまあやすと挨拶…若い人は言わない、矢張り60歳以上の地の人。滋賀特有のなあしというのはいもうほとんど消えた。たとえば、そうですね という相づちの言葉だと思ひます…そうどすなあし…という。少し丁寧な使い方かと思われる。90歳越した祖母が法事の席などで話していた中の言葉。疲れたなあという時…せんどしたなあ シトクレヤスは…しとうくれやす…と一部分伸ばすのでやわらかくきこえるのかと思う。</p>

自分の親の年代によく聞いた言葉ですが、現在の自分たちはめったに使わない言葉が多く、なつかしいですね。全く意味不明のことばもあり・・・滋賀も広いなあ～
滋賀に来た当初、関西弁はカルチャーショックで、孤立感を深めたことを思い出します。グローバル化の現代では近江ことばの衰退は避けられないでしょうが、“理解を図るための言葉”という観点で考えると、方言と共通語をうまく使い分ける必要があるのでしょうか。子育てにおいても、我が子がどこに行ってもよいようにと、なるべく共通語の使用を心がけました。社会人になった子どもたちに聞くと、家では共通語的、学校や友達とは関西弁と、使い分けてたそうです。
ミダカルは彦根でマツバルだときいたことがあります。嫁ぎ先でナンバやるか？といわれ、てっきりウモロコシだと思っていたら、シントウガラシのことで、びっくりしたことがあります。
亡くなった明治生まれの祖母は岐阜県の出身で、転勤の多い世帯だったので、近江ことばか岐阜の言葉か分かりません。「～しなさい」を「～しない」とか、「～なあし」とよく話していました。京都新聞で調査のことを知り実家の両親に渡してみました。父は親戚に言葉の研究をしている人がいるために興味津々で取り組みました。母は要介護で自宅で過ごす時間がほとんどのため、こんなことなら家ででもできるなあ、と、少し社会との接点を感じてくれたようです。ことばを話題に昔の話も聴けてよかったです。そんなわけで企画に感謝しています。ありがとうございます。
KBS(京都放送)ラジオの某番組でパーソナリティーをしております。生まれ育った近江のことば、私も大切にしたいと思っていたところ、この調査を知り、番組内でもご紹介しました。大変反響も大きく、・滋賀で勤め始め「もう、いなくなったか？」と聞かれ、とまどった京都の方や、・今も「～してらる、来らった、おいねる、いかい、ほやさけ」等まだまだ使っています。という湖南市の方など。多くの方が「近江ことば」に愛着を持っておられることがわかりました。又、大阪・池田市の方は神戸のご出身で「いっとお」「やっとお」「しっとお」など代表的なことばだと、メッセージをもらいました。知れば知るほど面白いことば。増井先生のご本も拝見し、ますます興味を深めています。 今年の“おせち”も面白かったです。調査、またご協力できたらと思います！ この結果も楽しみにしております。 滋賀のええもん！ これからも広く発信して行きます!!
私の住んでいる地域では、京都のことばの影響があると思います。特に大津では京ことばを使う人が多い。私の草津でも草津川をはさんで北側の山田と矢橋では1kmも離れていないのに違うことばが多いなど、地域差があります。狭い地域での違いがなぜなのか？に興味があります。
滋賀県内でも地域(北部 東部・・・)によって言葉がずいぶんちがってくる。おもしろいなと思った。中日新聞の折り込みの広告(地方版の新聞です)湖北の方言についての特集の記事がのってる日があります。
県北部は言葉もイントネーションも違う。他府県も地域によってこんなに違うのか不思議に思う。
東近江市甲津畑町という集落がありますが、特殊な方言があり、私たちには話しておられても理解できない言葉です。が、50代の世代から他地域との婚姻ができ、徐々に変わりつつあります。
近江ことばというよりは、方言はイントネーションと特有の言語がとつてもたのしく、特に近江のことばは、おっとり、おだやかな所があり、関西の中でも京都弁について好ましく思います。
アンケート2)の中に出てくることばの中には祖父母が使っていたことばも多くあり、なつかしく思い出しました。方言でしか表現できないこともあり、微妙な言い表し方のできる近江ことばは宝物です。今でも年配の(私よりずっと)方たちの会話には思いやりのあるやさしいものが多く、耳にするたび心がなごみます。核家族化など異世代間の交流が減ってきた結果やテレビの影響で、大人も子どもも使うことばが貧弱になってきているのでは……。アンケート1)の彼岸花ですが、私の祖母(明治生まれ)は「きつねのかみそり」と言っていましたし、私も小さい頃はそうに言っていました。
近江商人にまつわる言葉の大切さというのは、感じさせられました。確かに独特の柔らかさがあると思います。母が京都で父が大阪なので、滋賀県の地元の言葉は柔らかく、丸い言葉だなと感じます。京の商人、大阪商人、近江商人と、3つを比較すると、商売と言葉の関係などが出てくるかもしれないですね。商いと言葉の巧さなどいかがでしょうか。
⑧かまわないを「ダンナイ」と今でも時々おもしろがって使っています。
近江ことばは円みがあって柔らか味のある言葉で、相手にソフト感を与えるような言葉と思う。近江ことばで例えば喧嘩しても、相手に威圧感を与える事ができないと思う。私が20歳の頃(50年前)瀬田大萱の友人宅に行ったところ、おばあちゃん(80歳ぐらい)が出て来て「おめー」は「どこの人かいなあ」と聞かれて、友人は苦笑していたのを思い出しました。
明治生まれの祖父母が使っていた言葉は今ではほとんど使われないと思います。発音もできない言葉があります。同じ家にしたのに、言葉が違ってくるのが不思議です。
私は南部出身なので、仕事で北部のほうへ行くと、わからない言葉をつかわれることが多い。北部のほうでは若い人も、まだ近江ことばを使っているような気がする。
私は大阪に29年住み、滋賀県の人と結婚して滋賀県在住となり14年になります。また、結婚前1年半ほど仕事に来ていました。滋賀県は方言がきつなく、同じ関西ですし、ほとんど言葉も同じ、違いはないと思っていました。ですが、日常で時々聞いたことのない言葉遣い、自分ではしない言葉遣い、知らない単語が出てきて、不思議に思うことが出てきました。この調査で改めて違いや特徴、近江ことばというものを知り、とても面白かったです。同じ滋賀県でも南部と北部ではずいぶん言葉が違うような気がします。北部ではまだ近江ことばが残っているように感じます。
大阪市内の商家に生まれ育ち、京都で仕事に励み、60歳を過ぎてから大津に移り住み、滋賀県の方々と話していると、なぜか心が和み、故郷に帰ったような気がする。これが近江ことばの魅力なのでしょうか。それとも、関西弁とは異次元の共通語の使用を強要された職場と、柔らかかそうでありながらも底意地悪く聞こえる京都弁から解放されたからでしょうか。ともかく今は優しい近江ことばにひたっています。

## “近江ことば いまむかし”調べ

滋賀県に住んでいて、心の休まるひと時といえ、地元の皆様と一緒に近江ことばで話しているときです。これは他府県から移り住んでこられた方も感じられているそうです。

近江ことばといえ、アクセントの高低差が少ないとか、音便がどうかと様々に言われていますが、断定の「ヤ」や否定の「ヘン」に特徴付けられるように、聞く人に刺激を与えず、気持ちをやさしく伝えられる言葉です。かつての近江商人が全国で活躍されたのも、わかりやすく、やわらかくて温かい近江ことばで話されていたからでしょう。

その近江ことばも、今では使われる方が少なくなったようにも感じます。その要因は色々あるでしょう。とはいえ、これまで愛され続けてきたことばがなくなることはありません。小さなお子さんからお年寄りまで、心うちとけて会話をはずませる折には、きっと使い慣れたことばが出てくるはずです。

今回の調査では、近江ことばが本当に使われなくなっているのだろうか、いやいや、まだまだ健在である、というような事を少しでも明らかにしようとするものです。また、使われる人の年齢・性別やお住まいの地域、殊に、言語生活に大きく影響をもたらすといわれる幼・少年期をどこで過ごされたのか、などによって違いが見られるのか、更には、職場で使われていることばが、日常生活での会話にどのように影響を及ぼしているのか、などについて調べていこうと思っています。

一口に近江ことばといっても、言葉数だけでもおびただしくあり、しかも県内各地で微妙に異なっています。そこで、言語学者で近江ことばに造詣の深い増井金典先生のお許しをいただき、先生の著書からいくつかの言葉を選び、使われ方についてのアンケート調査を行うこととしました。また、近江ことばについて、お気づきの点やお考えを自由にお書きいただく欄も設けました。宜しくをお願いします。

回答締め切りは 2010 年 1 月末日としますので、正月休みなどに、ごゆっくりご記入ください。また、ご家族・ご親戚やお知り合いにも回答していただければ幸いです。